
自殺学級

かたな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺学級

【Zコード】

Z0148A

【作者名】

かたな

【あらすじ】

退屈な日常に飽き飽きしている卓也は、ある日同じ学校の生徒の自殺を知る。そしてその生徒に共感した卓也は非日常へとはまっていく…

第1話

・卓也はいい加減つんざつしていた。

いつもと同じように学校に行きいつもと同じ授業を受ける。

そんな毎日に飽き飽きしていた。

何か刺激的なことがおきないか、いつそこの世界など滅んでしまえばいいのに、そんなことさえ考えていた。

「帰るーぜ、卓也」

聞き慣れた声がして、教室の入り口に田をやるとそこに友人の明雄がたつっていた。

卓也と明雄は違うクラスではあるが幼なじみで幼稚園からの付き合いだった。

卓也は小さく頷くと教室を後にした。

帰り道で卓也と明雄はとりとめのない話をしていた。そうしていふうちにふと毎回の思いが頭をよぎった。

卓也は明雄もまた自分と同じ考え方なのか知りたくなった。そこでずばりきいてみることにした。

「なあ、最近おもしろいことないよな?」

返ってきたのは意外な答えだつた。

「そんなこともないけどな。結構樂しいよ毎日」

卓也は驚いた。同調してくれるのではと少しばかり期待していたのに。

「そつかー。それなら別にいいんだけど」

「卓也はなんかつまらない」とあるの?」

明雄の返事に一瞬本心を答えそつになつたが平静をよそおつて言つ

た。

「いや別になんでもないよ」

「そお。じゃあ俺」しつちだから、また明日な

明雄と別れ一人家路に着く卓也。「俺は独りぼっちなのかな…」

卓也は自分と同じ考え方を持つている人がたくさんいると思っていた。
しかし、明雄との会話でその考え方を改めた。

「ただいま」

返事はない。

この時間は母も外出しており一人である。

家に着くとやる」ともなく部屋のベッドに寝転んだ。

第2話

どれくらいいたつたださう。

あたりはすっかり暗くなっていた。

寝ていたことに気付いた卓也は体を起こし、部屋から出た。

それと同時に母の声がした。

「卓也、これちょっと見てよ」

「なんだよ」

「いいから見てよ、これあなたの学校でしょ」

母の指すテレビからはニュースが流れていた。

『今日午後七時頃、県立東高校屋上から飛び降り自殺がありました

…』

卓也は一瞬耳を疑った。しかしさらに驚くべきことが卓也を襲った。

『…亡くなった生徒は、佐伯静江さんとみられており…』

佐伯静江は卓也と同じクラスの生徒だった。

頭もよく美人であったので学校中の憧れの的であった。

そんな佐伯が自殺した。卓也の頭は混乱していた。なにがあつたんだろう？ 考えても考へても答えなどでなかつた。

テレビでは佐伯の遺書の話をしていた。それによると、（退屈な世界にさようなら。一緒にいこうね）と書かれていたらしく。

これをみて卓也の体に衝撃が走った。

佐伯は自分と同じ考え方を持っていた。

佐伯に少し憧れていた卓也は彼女に近づけた気がしてたまらなく興奮した。

それと同時にもっと近づきたい衝動に駆られた。

佐伯は自分が思いもしなかつた方法でこのつまらない日常を抜け出した。

ならば自分がとる手段も一つしかない。そう考えた卓也はふと、遺書の最後のフレーズが気になった。

一緒にいこうね。このフレーズは？

しかし、すぐに卓也の頭の中に答えが浮かんだ。

「これは俺を誘ってるんだ！」

つい喜びのあまり声がでた。佐伯静江は俺を誘っている。卓也は一段と彼女に近づけた気がした。

第三話

外はもう明るくなっていた。

夜が明けても興奮は収まらなかつた。

卓也は一晩中、佐伯静江のことを考えていた。
まるで夢の中にいるようだつた。

「卓也、朝ご飯よ」

卓也はその母の声で一気に現実に引き戻されてしまった。
少し興醒めしながら階段を降りそのまま朝食の席についた。
「今日、学校あるの？あんなことの後なのに」

「朝に説明かなんかするんじゃない？」

卓也は食事を済ませると急いで支度をし、学校へ向かつた。
案の定、通学路では昨日の事件で持ちきりだつた。
みんなが噂をしている。

卓也は自分が佐伯のことを知つていると思い込み、優越感に浸つていた。

「卓也おはよー。見たよな？昨日のニュース。今朝もすこかつたぜ、
カメラとか来てないかな？」

明雄が興奮気味にまくしたててきた。

卓也は笑みがこぼれるのを押さえて平静を装つた。

「見たよ。すごいな」

「何で自殺なんかしたのかね？俺には全然わからないよ

卓也は、それはお前なんかにはわからないだろ？と思いつつ、そんなことを解らない明雄に軽い軽蔑さえ覚えた。
そして、つい言ってしまった。

「俺はよく解るよ」

「嘘だろ？お前おかしいんじゃないの？」

卓也は明雄のこの返事にカツとなってしまった。

「お前は死にたいって思ったことないのかよー？」

卓也の強い口調に、明雄はたじろいで話題をかえようと必死になつた。

そんな明雄を見て、卓也も我に返り明雄と他愛もない話をしているうちに学校へと着いた。学校では朝から全校生徒を集めて、校長が説明を行なつていた。

故人の冥福を祈り、教室へ戻ると卓也の周りの生徒が急に避けるようになつていた。

朝の明雄とのやりとりを同じクラスの生徒に見られていたのであるらしかつた。

卓也は元来そういうことを気にするたちではなかつたが噂はすぐで学校中に広まつた。

死にたがりの卓也として見られるよつになつた。

第4話

その日の放課後、卓也は担任の高橋に呼び止められた。

「上杉、このあと視聴覚教室で待つてくれ」

「何のよつですか？」

「後で話すから」

「わかりました」

担任の言葉を怪訝に思いながらも、卓也は言われたとおり視聴覚教室に行つた。教室にはすでに一人の生徒が待つていた。

卓也は後ろのほうの席に座り、高橋を待つた。

先に来ていた二人とは同じクラスであったが卓也はあまり知らなかつた。

だから話し掛ける気にはらなかつたが、二人はこちらを見ながらひそひそと話している。

それが卓也は気に食わなかつた。

その内に日も傾いてきて夕日が室内をオレンジ色に染めた。

卓也もそろそろ疲れを切らしていた。その時、教室のドアを開け高橋が來た。

「すまんな、遅れて」

高橋はそのまま教壇に立ち、話し始めた。

「集まつてもらつた理由がわかるか？」

卓也は心当たりもなく、黙つていると高橋は話を続けた。

「集まつてもらつたのは佐伯の自殺のことについてなんだ」

卓也は動搖した。

もう担任まで話がいつてるのかと思つた。他の一人も明らかに動搖していた。

「先生、俺たちとそのことがどういう関係があるんですか？」

卓也は高橋に詰め寄つた。しかし、高橋はなだめるよつて言つた。
「言いにくいことなんだが、お前たちが佐伯のあとを追おつとしていると聞いたんだ」

卓也も他の二人もそれを否定しなかつた。

高橋はさらに三人に、

「お願ひだ。そんなことはしないでくれ。馬鹿なこと考えないでくれ」

と言つた。

すると今まで黙つていた二人のうち一人が口を開いた。

「もう遅いんです。約束したんですから。もうそろそろ迎えにくると思います」

卓也は何を言つてゐるのかわからなかつた。

約束つて何のことだ？迎えにくるつて？考へてゐるうちに嫌な答えに辿り着いた。

あの佐伯の遺書…あれは、俺に当たるものじゃなかつたのか？この二人にあてたものだつたのか？卓也は急に自分が醒めていくのを感じた。

風が変わつた。

いやな空気が窓からはいってくる。その窓のほうを指して一人が言った。

「ほり、来た」

卓也は窓のほうを見た。

そこには何かが立っていた。

それは卓也もみたことあるものだつた。

いや人というべきか。

佐伯静江がそこにいた。卓也の頭は混乱した。俺は幽霊をみてるのか？

佐伯への、死への憧れなどもついこにはなかつた。

佐伯は手招きをしている。

それに導かれるように一人は窓のほうに寄つていいく。

それを制止しようとする高橋。

やがて制止を振り切り、一人が視界から消えた。

卓也の目にはすべての光景が映画のように映つていた。
現実とは思えなかつた。

いや、思いたくなかった。

目の前で二人の人間が死んだ。

そのことについては何の感情も沸かなかつた。

ただ虚無が広がるばかりだつた。

しかし、すぐに恐怖が芽生えてきた。

佐伯がまだそこにいた。まるで卓也を呼んでいるかのよつて。

「来るなー！」

卓也は叫んで教室を飛び出した。

第5話

教室をでた卓也はいそいで家に帰った。

そのまま自分の部屋に入り、ベッドに縮こまる。

学校での光景が頭から離れない。

一人の人間が飛び降りる。

そして佐伯の幽霊…気持ち悪いものがこびりついている感じがする。

俺が見たのはなんだつたんだ?いくら自問しても答えのない。

卓也はまだ震えるしかなかつた。しばらくすると、

「卓也、なんかやつたのあんた?高橋先生から電話よ」

高橋からの電話の内容は卓也にとってわかつてはいたが衝撃的なものだった。

佐伯静江と他の飛び降りた二人は自殺しようとした決めていたこと、佐伯の遺書は一人にあてたもの、そして、

「上杉、お前あそこで何をみたんだ?」

「先生みえなかつたんですか!?佐伯の幽霊が?」

それは卓也にしか見えていなかつた。

いやあの教室で見えなかつたのは高橋一人。

それならば…卓也はカーテンの隙間から外を見た。

それは確実にいた。

自分に共感した卓也を導くかのよう…。

卓也は恐怖した。

このままでは自分の番だ。

部屋に戻り鍵を締める。

ベッドで力タカタ震えていた。

必死にどうすればいいか考えた。

しかし、それはもう目の前まで来ていた。

意に反して優しく微笑む佐伯。

卓也の恐怖心は次第に薄れていった。

憧れを抱いていた気持ちが心の奥から沸き上がってきた。

「行きましょう…」

「…ああ」

卓也は導かれるままに窓の外に出た。

—これで退屈な日常から解放される—『続いてのニコースです。今

日夕方飛び降り自殺とみられる…』

「最近多いよね、この手のニコース」

第5話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。気付いた点や批評してくれば幸いです。よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0148a/>

自殺学級

2010年10月9日23時22分発行